研究論文

鳴門教育大学情報教育ジャーナル No.15 (1) pp.43-50 2017

感動体験に伴う感情が中学生の人間的成長に与える効果の検討
－自立，協同，創造の観点から－

柳井智美*，皆川直凡**

人は，様々な体験を通して時には感動を経験する。特に，児童期から青年期にかけて経験する感動は，アイデンティティを形成・拡大する上で重要な役割の一端を担うと考えられる。本研究では，感動を「複数の強い感情が生じ，心が動かされるような身体反応を伴う情動的反応である」と定義し，感動に伴う感情とそこから生じる認知的な変化について検討を行った。その結果，感動によって「活動的快」，「非活動的快」，「感銘」という感情が想起され，それらは「自立」，「協同」，「創造」という認知的な変化に影響を与えることが示された。また，「創造」の認知的変化から「自立」，「協同」に影響を与えることも明らかとなり，総合的な感動に関するモデルを見出すことができた。

［**キーワード**：感動体験，感情，自立，協同，創造］

1. 序論

1.1 感動とは

人は，自分自身の努力が報われるなどといった能動的な体験や映画や本など受動的な経験を通して感動を体験する。この感動とは，わが国独自の概念であるため，欧米には感動を的確に言い表す名詞そのものがない(戸梶，1997)。そのため，欧米における研究例は少なく，概念すら未だ確立されるまでにいたっていない。戸梶(2001)によると，感動とは情動的に心が動かされる状態のことであると定義されている。彼は，感動の類型化を試み，ストーリー性の有無の違いによる包括的な感動のプロセスモデルを導き出している。そのモデルによると，物語の基本構造となる人物と状況設定が知識として成立し，そこへ複数のエピソードが加わることにより，テーマ・ゴール・プランを用いた推論がなされる。このテーマとは，何らかの形で万人に共通するものとなっており，高関与状態を生み出す。そこから，潜在的願望であるヒーロー／ヒロイン・スキーマが活性化されてテーマへの感情移入と共に結果への期待が強まる。このとき，感情の側面が活性化されて期待や不安といった心的緊張感及び心拍の亢進，血圧上昇などといった身体的緊張が生じる。その後，事象の終結とともに，最終的な評価が行われ，種々の感情を含んだ感動が喚起され，各側面での緊張の緩和が評価という認知的事象と一体化して感動という強烈な感情の高揚を生じると掲げられている。

また彼は，従来の感情研究と比べ，感動は複数の感情との間に密接な関係をもち，従来の枠組みである単一感情では捉えられないという感動の特殊性を指摘している。

一方で，山根(2010)は，感動のクオリア(質感)について，固有感情である証拠がないことを論じ，基本感情の単純なバリエーション(強化態・混合態)としては説明しきれないことを示唆した。そのうえで，感動のクオリアは「動く」という様態であることを示し，他の感情体験時にこの振動を体験すれば，それは感動を伴った感情体験ということになる。そして，感動体験の構成要素は対象性，心的動揺，身体反応の一連の反応であると表現した。以上の検討から彼は，感動を静止性に捉えることは正しくなく，強い情動であることも否定できないとし，感動は情動的興奮から精神的悦びにいたる自己の全存在を通しての全身的な反応であることを指摘している。

また橋本・木村(2016)は，感情コンピテンスに着目し，学級適応感と感情コンピテンスが感動に与える影響を検討している。その結果，自己開示の効果が友人関係やメディアによる感動体験に，感受性はすべての感動に影響を与えることを明らかにしている。

1.2 感動体験と人間的成長

感動は，上述で述べたような感情や身体反応などとの関係で説明することができるが，感動を体験したことをきっかけに，今までの考え方や物事に向かう姿勢が変化につながることがあり，これもまた感

* 東大阪市子どもすこやか部子ども子育て室子ども応援課
** 鳴門教育大学 大学院 基礎・臨床系教育部

動を捉えるうえで重要となる。

児童期・青年期の感動体験が与える影響として，戸梶(2004)は，感動が動機づけ，認知的枠組みの更新，他者志向・対人受容に効果があることを明らかにし，それらの効果はすべてが人間にとって重要な営みと関係しており，感動という情動反応が人間にとって重要な局面で働いている可能性を示唆した。

佐伯・新名・服部・三浦(2006)は，児童期における感動体験が自己肯定意識のうち「充実感」と「自己表明・対人積極性」を高めることを明らかにしている。

橋本・小倉(2002)は，感動経験は，個人にとって何らかの意味での「よさ」との出会いや発見を含み，貴重でかけがえのない機会であったと回想されることも少なくない。しかしそれは単純に快感情だけの経験ではなく，むしろ混合感情としての性質を有しているということを前提に共感性との関係を調査している。その結果，「想像的感情移入」，「他者の立場への理解」，「愛他的関心」といった種の共感性との相関が明らかとなった。その結果から，感動は，受動的に感情を動かされる傾向ではなく，能動的に外界や他者を分かろうとする傾向の表れであるのかもしれないと示している。

また，感動を体験した直後のみならず，想起することによっても当時の状況を思い起こし，追体験することで再び動機づけが強化されるなどといった変化が生じると考えられる。このことについては，速水・陳(1993)が，感動を自伝的記憶の一つとして捉え，体験を振り返ることで動機づけを高める可能性があることを示唆している。同様に，中西(2007)もまた，感動体験を想起することが効力予期，結果予期，興味価値，利用価値，私的獲得価値，社会的環境，身体的要因の動機づけを高める効果となることを明らかにしている。

他にも，加藤・村田(2016)は悲しみを伴う感動体験は感動の強さを媒介して時間イメージを肯定的にすることを指摘しており，感動を体験することで現在より先の見通しを明るくする可能性があるといえる。

1.3 発達段階と感動

これまで述べてきたように，感動は老若男女問わず経験され，時には人生の転機ともなるきっかけになるなど，何らかの認知的な変化が生じる。そういった感動を体験することは，それぞれの発達段階においても発達課題を乗り越えていくうえで重要な役割の一部を担うのではないだろうか。

例えば，Erikson(2011)の発達段階と発達上の中心テーマによると，児童期における発達の課題は「勤勉対劣等感」とされている。この段階では，日常生生活に学業が加わり，様々な経験から学びを得る段階である。子どもは，役に立っているという感覚を得ることで物事を上手に作ることができ，完璧に作ることさえできるという感覚がないと不満を抱く。これを「勤勉の感覚」といい，この段階では完成させる喜びを味わう一方で，不全感や劣等感の増大が危機となる。そしてこの勤勉性には，他人と並び他人と行動することが含まれるため，分業や機会均等といった感覚が初めて発達する社会的に重要な意味を持っている。また，青年期における発達の課題は「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」とされている。この段階は，これまでの子ども時代の段階における経験から生じる内的資質を同一化し，個人の基本的な欲動やその人の資質や機会と合致していくという「自我アイデンティティの感覚」が生まれる。この段階では，様々なジレンマ，役割に対する混乱などアイデンティティの拡散が危機となる。この自我アイデンティティは，子ども期初期からその後の社会的役割が可能になりそれに対し強制的に感じるような時代へ向けての橋渡しとなる。あらゆる段階において，自我の強さが増える感覚を創り出す達成感がなければ完結できないとされている。

他にも，これまでの先行研究より感動体験が自尊感情や自己肯定意識(佐伯ら，2006)，認知的枠組みの更新(戸梶，2004)などに影響を与えることが明らかとなったことからも，児童期や青年期において感動を体験することは，自信につながり劣等感を乗り越え，自我を見出してく一端となる可能性がある。戸梶(2004)もまた，思春期から青年期にかけての深い感動は人間的成熟に影響を与えると述べている。

教育現場でもまた，文部科学省の第 2 期教育振興基本計画(2013)において豊かな心の育成が施策されており，豊かな情操や規範意識，自他の生命の尊重，自尊感情，他者への思いやり，人間関係を築く力，社会性，公共の精神，主体的に判断し適切に行動する力などを育むことが求められている。これは感動とも深く関係していると思われる。

これに関して皆川(2015)は，現在の 21 世紀の新しい学びについて，自律的な学びに関する研究，協同的な学びに関する研究，思考力・表現力を育てる学びに関する研究，創造的な学びに関する研究に分類して検討をしている。そこから，学習者の内発的動機づけや学習プロセスを重視し，自分とは異なる意見にも耳を傾けることを促し，他の場面への学習の転移や発展にも目配りをするといった，自律，協同，創造を統合した教育研究を進めていくことが新しい

学びを形成することにつながると指摘している。

児童期・青年期以外の発達段階について，角田(2011)は，幼児期の感動体験に着目し，幼児の感性を育てるために，自己実現への援助者である保育者が，幼児の感動を共有することが感性を増幅させることにつながると指摘している。小倉ら(2003)，橋本ら(2003)は，成人期を対象に想起された感動体験が充実感や意欲を高めるといった心理的変化を生じ，同一性感覚に正の相関があること明らかにしている。

このように，感動はどの発達段階においても発達的意味を担うことがわかる。中でも，人間的成長に大きく揺れ動く時期である児童期から青年期にかけての感動体験は，その後の発達にも影響を与えると考えられ，本研究では児童期・青年期を対象に検討を行う。

1.4 本研究の目的

これまで述べてきたことから，感動は，確かに情動的反応，身体的反応があることには異論なく，それらの反応が生じている状態を指すといえる。

よって本研究では，感動を「複数の強い感情が生じ，心が動かされるような身体反応を伴う情動的反応である」と定義する。

そして，感動を生起するメカニズムは，受動的な感動と主体的な感動とで若干の差があると考えられる。どちらにしてもその出来事，体験にどれほど没入できる状況にあるかによって，感動と捉えられる種々の反応が生じる条件となるのではないかと考えられる。さらに，感動体験によって様々な認知的な変化がもたらされることは明らかであり，それらは特に児童期から青年期にかけて体験することでアイデンティティの確立などの発達課題に影響を与えるであろう。

そこで，本研究では中学生を対象に様々な感動体験に伴う感情と人間的成長への影響を調査することを目的とする。このとき，感動に伴う感情は，Russell(1980)の感情の円環モデルにおける怒りや憎しみといった第 2 象限に位置する感情は喚起されないものとする。また，感動によって自分自身の内的成長に向かう「自立的志向」や他者と関係性の向上に向かう「協同的志向」，さらには新たな考え方や価値観と出会い，未来に向けた「創造的志向」に影響を及ぼすのではないかと想定し，感動の性質を明らかにしていく。そのうえで，感動がどれほど発達的役割を担い，教育現場においてどのように活用していくことが必要であるか考察していく。

2. 方法

2.1 調査対象者

兵庫県および秋田県の公立中学校 3 校の 976 名(1 年生 333 名中男子 158 名，女子 173 名，不明 2 名，2 年生 331 名中男子 160 名，女子 163 名，不明 8 名，3 年生 312 名中男子 173 名，女子 138 名，不明 1 名)を対象とした。

2.2 調査期間

2011 年 11 月～12 月にかけて実施した。

2.3 調査内容

中学生の感動体験に関する質問紙を 2 種類使用し，クラスごとにランダムに配布、実施した。それぞれの質問紙は，中学生が感動すると思われる場面を 3 場面ずつ設定し，場面ごとに感動したときの感情，感動体験をしたのちに起きた変化について 5 件法で聞いている。用意した場面は，「何かを達成して感動したとき」，「人とふれあって感動したとき」，「生き物と交流して感動したとき」，「誰かと協力したり助け合って感動したとき」，「何かを見たり，聞いたり，読んだりして感動したとき」，「風景を見て感動したとき」の 6 場面を用意した。一つの質問紙には 3 場面ずつ構成した。

さらに，感動したときに生じると思われる感情の 12 項目と自立，協同，創造を想定した人間的成長の 17 項目について調査した。

質問紙はまず，「あなたが今までに体験したことのある「感動」について調べようとするものです。」と伝え，中学生が想起する感動，すなわち児童期から青年期にかけて経験した感動体験について尋ねている。フェイスシートでは，学年と性別について記入してもらった。具体的な質問内容は，6 つの場面それぞれに対して，どんなときに体験したものかを詳細な場面について選択してもらい，それに対してその体験をしたとき、どのようなことを感じたのか、その体験をした後、あなたの心や行動にどのような変化があったのかそれぞれ 4 件法で尋ねた。

2.4 手続き

各中学校に質問紙と実施要領を配布し，各クラスの担任によって質問紙が実施された。実施後，速やかに回収し，表計算ソフトウェア Microsoft Excel の分析ツールおよび統計解析ソフトウェア IBM SPSS Amos を使用して分析を実施した。

3. 結果および考察

3.1 信頼性・妥当性の検討

最初に，感動そのものの性質を明らかにするため，すべての場面を対象に分析を行った。その上で一つでも無回答の項目があるものや重複回答のあるものを除外したところ，有効回答数は 2622 件であった。それらを対象に Cronbach の α 係数を算出したところ，感情項目に関しては 0.87，人間的成長については 0.96 と，どちらにおいても内的整合性の高い項目であることが示された。

3.2 感情および人間的成長項目の因子構造

感情の項目，人間的成長の項目それぞれについて確認的因子分析(最尤法，プロマックス回転)を実施した。その結果，どちらの項目においても 3 因子構造であることが立証された(表 1，表 2)。

感情の項目では，「びっくりした」という 1 項目において因子負荷量が低い値であったため，分析の対象から除外した。除外した 11 項目について再度 Cronbach の α 係数を算出したところ，0.86 と内的整合性も保たれていた。

因子分析によって構成された感情の 3 因子について，第一因子は Russell(1980)の円環モデルに照合すると，覚醒状態の強くない 5 つの快の感情から構成されたため，「非活動的快」と命名した。同様に，第二因子は，覚醒状態の強い 3 つの快の感情から構成されたため「活動的快」と命名した。第三因子については，他の因子と異なり，快感情と不快感情が混在しており，感動を喚起する上で重要となる感情から構成されているため，「感銘」と命名した。これらの因子のうち「非活動的快」および「活動的快」は，それぞれ内的整合性の高い値となっている(α=.84，α=.82)。一方で，「感銘」に関しては，内的整合性が低く(α=.61)，これは今回の調査において「悲しい」といった感情を喚起するような場面を十分に想定できておらず，サンプル数が少ないこと，また，快感情と不快感情が混在する因子構造となったことからも納得できる。また，因子間の相関は「非活動的快」と「活動的快」の間で比較的強い正の相関があり(r=.59)，「非活動的快」と「感銘」(r=.22)，「活動的快」と「感銘」(r=.30)の間では低い正の相関となった。

人間的成長の 3 因子ついてついては，第一因子を自己に関する成長への意欲などといった自立的志向性を示す項目から構成されたため，「自立」と命名した。第二因子は対人的コミュニケーションへの意欲に関する項目から構成されていたため，「協同」と命名した。第三因子は，新たな考え方や未来的な志向性に関する項目から構成されていたため，「創造」とした。これらの因子はどれも内的整合性が高く(「自立」α=0.94，「協同」α=0.93，「創造」

表 1 感動体験による感情の因子構造

項目内容	F1	F2	F3	*M*	*SD*
因子 1 「非活動的快」(α=.84)					
4 幸せ	.80	.13	-.06	2.99	1.04
6 安心	.71	-.05	.09	2.76	1.08
1 あたたかい	.71	-.13	.19	2.86	1.07
2 うれしい	.52	.31	-.14	3.10	1.05
5 満足した	.51	.35	-.07	3.05	1.03
因子 2 「活動的快」(α=.82)					
11 わくわくした	-.71	.89	.08	2.80	1.10
12 楽しい	.10	.83	-.16	3.02	1.07
7 興奮した	.07	.56	.21	2.68	1.14
因子 3 「感銘」(α=.61)					
9 あこがれた	.02	.21	.63	2.22	1.16
8 悲しい	.02	-.13	.51	1.76	1.07
10 熱くなった	.07	.39	.45	2.59	1.15

因子間相関	F1	F2	F3
因子 1「非活動的快」	—	.59	.22
因子 2「活動的快」	.59	—	.30
因子 3「感銘」	.22	.30	—

表 2 感動体験による人間的成長の因子構造

項目内容	F1	F2	F3	*M*	*SD*
因子 1 「自立」(α=.94)					
9 がんばるようになった	.85	.05	-.01	2.84	1.03
11 目標を成し遂げようと思うようになった	.78	-.04	.13	2.82	1.06
1 努力するようになった	.78	.05	-.03	2.58	1.06
7 やる気を出して行動するようになった	.68	.11	.12	2.68	1.04
10 積極的に考えるようになった	.63	.13	.14	2.60	1.01
4 自信を持って行動するようになった	.55	.12	.15	2.53	1.03
15 自分の能力を高めたいと思うようになった	.53	.09	.21	2.83	1.09
3 前向きに考えるようになった	.50	.25	.16	2.69	1.03
因子 2 「協同」(α=.93)					
8 友だちと親しくなりたいと思うようになった	.09	.89	-.10	2.73	1.13
16 友だちと深く知り合いたいと思うようになった	-.06	.86	.12	2.63	1.11
14 人と一緒にいたいと思うようになった	-.01	.78	.14	2.73	1.14
12 友だちに対して優しく接するようになった	.10	.75	.06	2.65	1.07
2 友だちと喜びや悲しみを共有したいと思うようになった	.20	.71	-.06	2.60	1.11
因子 3 「創造」(α=.83)					
17 新しい発見をしたいと思うようになった	.09	.13	.62	2.70	1.08
5 より興味がわいた	.23	-.06	.58	2.87	1.06
13 やりたいことが増えた	.17	.14	.54	2.76	1.07
6 今までの考えが変わった	.34	.07	.41	2.58	1.04

因子間相関	F1	F2	F3
因子 1「自立」	—	.64	.69
因子 2「協同」	.64	—	.61
因子 3「創造」	.69	.61	—

α=0.83)，信頼性の高い因子構成であることが明らかとなった。よって，当初想定していた因子構造が採択できた。

また，因子相関はすべての構成で比較的高い正の相関があることが示された(表 2)。

以上のことから，感動体験に伴う感情は「非活動的快」および「活動的快」に相当する感情が喚起され，場面によっては感動特殊の「感銘」が生じる可能性がある。そして，そういった感動体験によって，「自立」，「協同」，「創造」への変化が生じることを示唆することができた。

3.3 中学生の感動に関するモデル図

ここでは，これまでに明らかになったことから，感情の 3 因子に相関があり，それらは認知的な変化に影響を与えると仮説した。この仮説において，認知的な変化の一つである「創造」は，さらに「自立」や「協同」へも影響を与えるとした。

この仮説に基づいてモデル化し，共分散構造分析を実施した(図 1)。その結果，モデルの適合度指標については χ^2=4091.23，df=336，p=.00，GFI=.89，CFI=.93，RMSEA=.07 と，許容できる範囲の適合度を得ることができた。この感動のモデル図は，総合的な感動体験を対象としたものであったために，モデル適合度がやや低くなったのではないかと考えられる。

具体的な内容に関しては，「活動的快」から「創造」への影響以外のパス係数はすべて 1%水準で有意であった(表 3)。また，「活動的快」は「自立」，「協同」への負の影響があると判断された。

次に，感情因子間の相関について表 4 に示す。その結果，「非活動的快」は「活動的快」，「感銘」のどちらともかなり強い正の相関があり，「活動的快」は強い相関があると示された。さらに，独立変数として位置付けた人間的成長の因子への重相関係数を確認すると，「自立」への影響が最も高いことが示された(表 5)。この結果から，感動に伴う「非活動的快」「感銘」の感情は「自立」，「協同」，「創造」の人間的成長に影響を与え，「創造」からも「自立」や「協同」へ影響を与えることが明らかとなった。

「活動的快」の感情から「自立」や「協同」への影響が負の効果であったことについては，覚醒に近い状態の感情は，確かに感動体験で喚起されるが，それは感動体験を時系列で捉えようとしたとき，感動したと同時に湧き上がる強い興奮状態を指すので

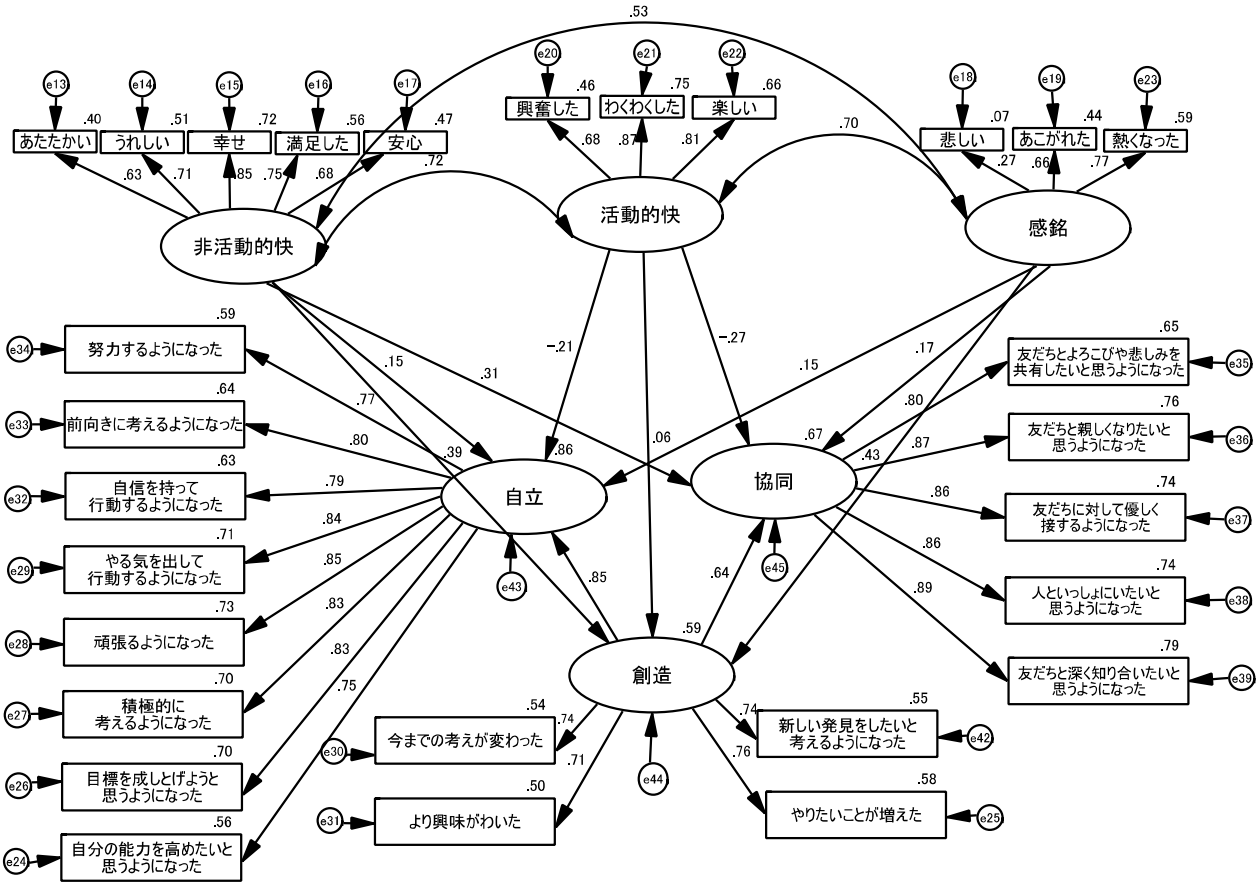

図 1 中学生の感動体験に伴う感情と認知的変化のモデル図

はないだろうかと考えられる。その後，出来事を顧みたり内省したりしている段階で興奮状態が安定し，非活動的快感情の喚起に伴って人間的成長に影響を与えるのではないかと推察する。

3.4 感動場面別に伴う感情と人間的成長への影響

ここでは調査した 6 場面のうち，①何かを達成して感動したとき，②誰かと協力したり助け合って感動したとき，③風景などを見て感動したときの 3 場面について，感情因子と人間的成長因子を平均化したうえで重回帰分析を実施し，それぞれの感動に伴う感情と人間的成長への影響可能性を調査した。下記にそれぞれの場面ごとの結果を記す。

(1) 何かを達成して感動したとき

自分自身の成功体験や努力の結果として得られる達成は，強い覚醒状態の感情を伴い，個人の自立的志向性を高めるのではないかと考えた。重回帰分析の結果，「非動的快」はそれぞれの人間的成長にすべて有意な正の影響があると示された(図 2)。

また，「活動的快」は「自立」「創造」へ有意な正の影響があり，「感銘」は「協同」と「創造」へ有意な正の影響を与えることが明らかとなった。また，すべての感情から与えられる影響はすべて有意であり，中でも「自立(R^2=. 67)」へ与える影響が最も大きいと示された。これによって，達成場面の感動体験では自立的志向性を高めるという仮説が支持される可能性が見出された。

(2) 誰かと協力したり助け合って感動したとき

他者との関わりの中で協力するなど状況を共有することで体験される感動は，個人の協同的志向性を高めるのではないかと考えられる。重回帰分析の結果，「非動的快」はそれぞれの人間的成長にすべて有意な正の影響があると示された(図 3)。

また，「活動的快」は「創造」へ有意な正の影響があり，有意ではないが「協同」へは負の影響がある。「感銘」は「創造」へ有意な正の影響を与えることが明らかとなった。また，すべての感情から与えられる影響はすべて有意であり，中でも「自立(R^2=. 63)」へ与える影響が最も大きいと示された。これによって，協力・助け合い場面の感動体験では自立的志向性を高める可能性がわかり，仮説とは異なる結果となった。つまり，他者との関わりの中で体験するような感動であっても個人の自立的な側面が育ち，アイデンティティの形成の時期にはこういった感動体験も重要となるのではないかと推察できる。

表 3 感情から人間的成長への影響

因子	パス係数(b)
非活動的快	
自立	. 15***
協同	. 31***
創造	. 39***
活動的快	
自立	−. 21***
協同	−. 28***
創造	. 06
感銘	
自立	. 16***
協同	. 17***
創造	. 43***
創造	
自立	. 85***
協同	. 64***

無印 p>. 10，*p<. 05，**p<. 01，***p<. 001

表 4 感情因子間相関

	活動的快	非活動的快	感銘
活動的快	−	. 72***	. 53***
非活動的快	. 72***	−	. 70***
感銘	. 53***	. 70***	−

無印 p>. 10，*p<. 05，**p<. 01，***p<. 001

表 5 人間的成長因子の重相関係数

人間的成長因子	重相関係数の平方(R^2)
自立	. 86
協同	. 67
創造	. 59

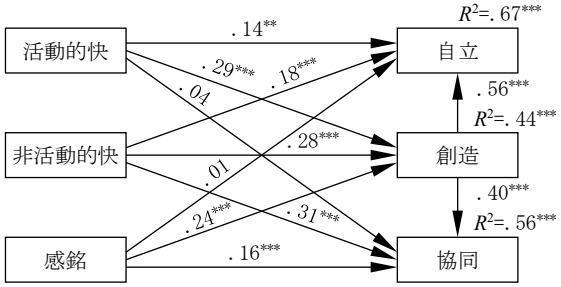

図 2 達成場面の感情と人間的成長への影響

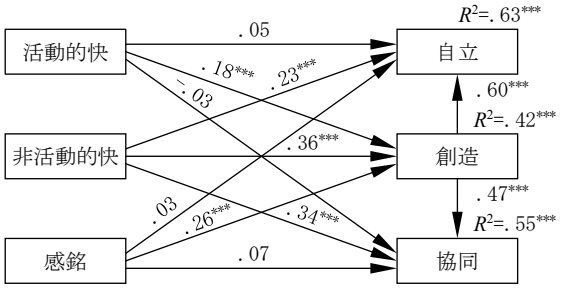

図 3 協力場面の感情と人間的成長への影響

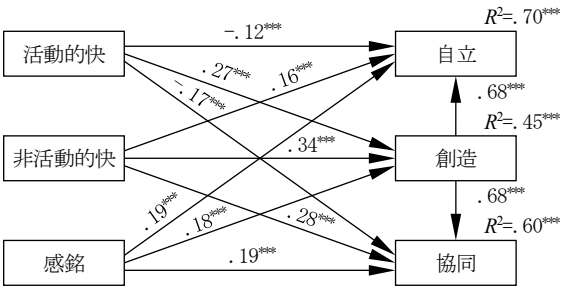

図 4 景色への感動の感情と人間的成長への影響

(3) 風景などを見て感動したとき

直接自分とは関連性はないものの，ふとした拍子に見えた風景によってもまた感動は喚起される。そういった外的刺激による感動は，心洗わせる経験をし，未来への希望を持ち創造的志向性を高めるのではないかと考えた。重回帰分析の結果，すべての感情がそれぞれの人間的成長に有意な影響を与えていると示された(図 4)。

「活動的快」は「創造」へ有意な正の影響があり，「自立」，「協同」へは有意な負の影響がある。「非活動的快」および「感銘」はすべての人間的成長に有意な正の影響がある。また，すべての感情から与えられる影響はすべて有意であり，中でも「自立(R^2=.67)」へ与える影響が最も大きいと示された。これによって，風景を見て体験した感動は自立的志向性を高めるという仮説とは異なる結果が見出された。つまり，他者との関わりの中で体験するような感動であっても個人の自立的な側面が育ち，アイデンティティの形成の時期にはこういった感動体験も重要となるのではないかと推察できる。

4. 総合論議および今後の展望

本研究によって，感動体験に伴う感情が人間的成長に影響を与えることが明らかとなり，これはアイデンティティの確立の時期である児童期・青年期において重要であることが示唆された。特に，本研究によって明らかとなった感動体験の性質より，人間的な成長をもたらすための感動には，刺激的な状況から喚起される活動的快の感情よりも，穏やかな感情や感銘することが必要であると導き出された。つまり，予期していなかった出来事などの単に刺激的な状況を作ることが成長につながるような感動ではないということが言え，教育現場や発達的側面を考えたときに重要な示唆を得ることができた。また，どのような感動体験であっても，自立的志向性が高まる可能性が見出された。しかしながら，感動をより的確に捉え，発達的側面や教育のニーズに寄り添うにはいくつかの課題が見える。

第一に，本研究では感動体験を総合的に捉えるには有効であったものの，様々な種類の感動体験に対して有効とは言えず，自分自身の直接的体験を通した感動体験と客体的な感動体験とでは，異なる反応があることが予測される。代表的な感動場面ごとにも影響可能性を調査しているが，多少の程度の差はありながらも，感動の種類による反応の違いまで十分に説明できるような知見は得られず，引き続き感動場面による差異を検討していくことが望まれる。

実際，戸梶(2001)においても悲しみを伴う感動体験や喜びを伴う感動体験など，感動体験に伴う感情の種類による検討がなされている。戸梶(2011)はまた，文脈のある感動体験を主体的経験と客体的経験に分類し，それぞれの分類によって生じる感情の差について考察している。その結果，感動はリアリティと事象・人物の関わりの程度で主体，主体的客体，客体に分けられ，それぞれの感動の種類によって生起される主な感情に差があることを指摘している。それを踏まえて戸梶(2012，2013)は，感動喚起尺度の作成を試みている。

第二に，戸梶(2001)の感動のモデルのように，感動を時系列で捉えることが，感動体験の複合感情の動きや，認知的な変化を捉えるうえで重要な知見をもたらすと考えられる。本研究においても，感動によって生起される感情が必ずしも同時に生起されているとは限らないことを示すことができた。また，人間的成長に直接影響する感動の種類も示唆することができたため，その点に関して今後は時系列で捉えられるような工夫を凝らしていくことが望まれる。そのためには，実験的調査やインタビュー，作文法などの質的な調査が必要である。

第三に，個人差の問題を忘れてはならない。今回の調査では，中学生の誰しもが経験している可能性の高い感動体験を設定し，全般的な感動体験の性質を明らかにすることが目的であったため，個人のこれまでの経験値など個人差を考慮していないが，感動は個人の体験に対する知識や経験がどれほどあるかによって，感動の程度は異なると考えられる。このことについて，Tokaji(2003)は，物語によるストーリー性のある感動体験において，その物語に関する事象の知識が感動喚起に関連すること，また熱中することでストーリーに対するヒーロー／ヒロインスキーマが終結への期待に影響し，感動が喚起されることを指摘している。

本研究では実際に，3 場面中 1 場面のみ無回答となっているものや，感情および人間的成長の項目の評価がすべて「感じなかった」あるいは「当てはまらない」と回答しているケースも見られた。これは

つまり，その感動体験をしていない，もしくは場面は思いついたものの，「感動」と捉えるには乏しい状況の想起であったのではないかと推察される。よって，個人の経験の有無や頻度などといった個人差の問題も解決していく必要がある。

さらに，今回は性別による感動体験の差について検討していないが，今後は男女間における感動の体験数の差や，生起される感情の差および人間的成長の差についても検討することが望まれる。実際，戸梶(2004)は感動が与える効果として，男子の方が「やる気」に効果を与え，女子の方が他者志向・対人受容に効果を与えることを指摘している。

第四に本研究では実施できていない妥当性の検討をしていく必要がある。そのためには，感動場面以外の状況について，同様に喚起される感情と人間的成長への影響について検討し，比較していくことが必要である。

以上のような課題を精査していくことが感動の研究の発展に結びつくと考える。

引用文献

E. H. エリクソン・西平直・中島由恵(2011) アイデンティティとライフサイクル，誠心書房，pp.86-102.

小倉丈佳・橋本巌・青木理奈・渡邉秀樹(2003) 成人期における感動経験の発達的検討(2)，日本教育心理学会第45回総会発表論文集，p.654.

橋本巌・小倉丈佳(2002) 青年期における感動経験と共感性の関係，愛媛大学教育学部紀要，第Ⅰ部，教育科学，48(2)，pp.57-73.

橋本巌・小倉丈佳・渡邉秀樹・青木理奈(2003) 成人期における感動経験の発達的検討(1)，日本教育心理学会第45回総会発表論文集，p.653.

橋本巌・木村若菜(2016) 児童期における感動経験と学級適応感及び感情コンピテンスの関係，感情心理学研究，24巻，Supplement号，p.os42.

速水敏彦・陳恵貞(1993) 動機づけ機能としての自伝的記憶－感動体験の分析から－，名古屋大學教育學部紀要，教育心理学科，Vol.40，pp.89-98.

加藤樹里・村田光二(2016) 悲しみを伴った感動が現在・未来の時間的展望に及ぼす影響，感情心理学研究，24巻，Supplement号，p.os04.

皆川直凡(2015) 21世紀の新しい学びに関わる理論と実践を結ぶ研究，教育心理学年報，54巻，pp.57-70.

文部科学省(2013) 第2期教育振興基本計画，http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/1336379.htm(最終アクセス日：2017年11月29日)

中西良文(2007) 感動体験の想起が動機づけに及ぼす影響，日本心理学会第71回大会発表論文集，p.903.

佐伯怜香・新名康平・服部恭子・三浦佳世(2006) 児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定意識に及ぼす影響，九州大学心理学研究，第7号，pp.181-192.

佐々木智美・皆川直凡(2013) 大学生・大学院生が想起する感動体験の特徴の分析－自伝的記憶としての感動体験－，鳴門教育大学情報教育ジャーナル，第10号，pp.21-28.

戸梶亜紀彦(1999) 「感動」に関する心理学的・認知科学的考察，日本認知科学会テクニカルレポート，研究分科会「文学と認知・コンピュータ」，pp.27-32.

戸梶亜紀彦(2001)『感動』喚起のメカニズムについて，認知科学，Vol.8，No.4，pp.360-368.

Tokaji, A.(2003) Research for determinant factors and features of emotional responses of "kandoh" (the state of being emotionally moved), Japanese Psychological Research, Vol.45, Issue.4, pp.235-249.

戸梶亜紀彦(2004) 『感動』体験の効果について－人が変化するメカニズム－，広島大学マネジメント研究，4号，pp.27-37.

戸梶亜紀彦(2006) 直接的な感動体験に必要となる要因について，日本心理学会第70回大会発表論文集.

戸梶亜紀彦(2011) 感動体験の類型化に関する検討－感動対象との関係性に基づいて－，日本認知科学会，文学と認知・コンピュータⅡ研究分科会第26回定例予稿集，pp.1-4.

戸梶亜紀彦(2012) 感動喚起測定尺度の作成に関する検討(4)－感動類型の客体における妥当性について－，日本教育心理学会第54回総会発表論文集，p.518.

戸梶亜紀彦(2013) 感動喚起測定尺度の作成に関する検討(2)－感動類型における主体的客体の場合－，感情心理学研究(20).

Russell, J. A.(1997) Reading emotions from and into faces: Resurrecting a dimensional-contextual perspective, In J. A. Russell & J. M. FernandezDols (Eds.), The psychology of facial expression, Paris: Cambridge University Press, pp.295-320.

山根一郎(2010) 感動のクオリア，山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科紀要，人間関係学研究，第8号，pp.97-109.